

早稲田大学大学院

人間科学研究科要項

1991年度

目 次

I	大学院人間科学研究科の概要	1
II	人間科学研究科の構成と特徴	2
III	早稲田大学大学院学則（抜萃）	4
IV	早稲田大学学位規則（抜萃）	6
V	専攻ならびに学科配当表	8
VI	演習および講義の概要	12
	1. 生命科学専攻	12
	2. 健康科学専攻	24
	3. 両専攻共通選択科目	35
VII	学科目の履修方法	40
VIII	教育職員免許状取得について	41
IX	学生生活等	42
	1. 学籍番号	42
	2. 学生証（身分証明書）	42
	3. システムカード	43
	4. 各種証明書の交付	43
	5. 諸願および諸届	44
	6. 大学院事務所の事務取扱い時間	45
	7. 掲 示	46
	8. 交通機関のストライキと授業	46
	9. 学生相談センター	47
	10. 保健室の案内	47
	11. 早稲田大学学生健康保険組合	48
	12. 奨学金制度	48
X	所沢図書館および中央図書館の利用について	49
XI	教員住所録	53

1991（平成3）年度大学暦

項 目	期 日	
入 学 式	1991（平成3）4月16日（火）	十 六 週
前期授業開始	4月17日（水）	
前期授業終了	8月3日（土）	
夏 季 休 業	自 8月4日（日） 至 9月15日（日）	
後期授業開始	9月17日（火）	十 七 週
創 立 記 念 日	10月21日（月）	
冬 季 休 業	自 12月17日（火） 至 1992（平成4）年1月7日（火）	
後期授業終了	2月6日（木）	
春 季 休 業	自 2月7日（金） 至 3月31日（火）	
学 位 授 与 式	3月25日（水）	

I 大学院人間科学研究科の概要

早稲田大学が1987（昭和62）年に設置した人間科学部は、人間基礎科学科、人間健康科学科、スポーツ科学科の3学科より構成されている。人間基礎科学科の研究と教育は生命、行動、環境が中心的課題であり、人間健康科学科は、人間の心の健康を中心として環境と人間の係わりあいを、スポーツ科学科は身体健康、運動能力の開発に主眼をおいている。いいかえれば、人間科学部は人間に関する諸科学を生命、環境、健康、行動といった側面に注目して教育しているといつてよい。

生命、環境、健康、行動といったことがらに対する社会的関心は、年々強まる一方であり、特に来るべき21世紀社会にむけて、生涯発達に沿った人間性の尊重、人間と環境との調和、健康の維持および増進を基礎とした生活の質の向上が求められている。このような視点に立った研究の展開とそれに基づく専門家の養成が強く望まれている。この要望に応えるために早稲田大学では、1991（平成3）年4月から人間科学部を基礎学部とする大学院人間科学研究科を開設することにした。

人間科学研究科の目指すところは、今後の人間の相互作用と健康といった観点よりの研究・教育である。

このような趣旨に沿って生命、環境、健康、行動という切り口を設定し、それにもとづいて人間科学研究科を構成する方法をとった。具体的には、人間科学研究科は、生命現象や脳の高次機能を分子のレベルで解明する領域、生き物である人間と社会的環境あるいは自然環境との係わりを中心とした研究・教育の領域と健康の維持増進のための研究・教育をする領域から構成されている。このために人間科学研究科には、生命と環境の相互作用、心身および人間と環境の相互作用の2領域を研究・教育の対象とする2つの専攻、すなわち生命科学専攻、健康科学専攻が設置されている。

○生命科学専攻

生命科学とは生命そのものを基本的に認識する学際的科学である。生物学は遺伝物質としてのDNAの発見によって大きく変容し、新しい生物科学の誕生を見るに至った。この結果生命現象の研究は大いに進み、医学、農学、薬学などの諸

分野との学際的研究が行われ、生命科学の誕生につながった。ひるがえって、人間の理解という観点で見ると、これだけでは不十分であり、生命と環境との相互作用という視点なしには正しい生命科学の発展が期待されないということも次第に明らかになって来た。そこで、生命科学専攻では、生命と環境とを架橋し融合させ、総合的な人間理解のための新しい生命科学の構築を目指している。

○健康科学専攻

激しい社会変動を遂げつつある現代の社会状況に生きる人間を考えたとき、このような社会における生活を豊かなものにするために緊急を要する課題の1つに健康の維持・増進がある。この問題に対して、心身の相互作用、環境と人間の相互作用の面より検討していくことが必要である。人間の健康をこのような心身と環境との総合的な問題状況に則して追究する試みは、むしろ健康の維持、促進を目指している点において、従来の疾病からの回復のみを意味する健康の概念とは異なるものである。健康科学専攻では、生涯発達という軸に沿って、心と身体の両者を含む全体としての人間を考え、同時にそれを取り囲む環境の変化との相互作用を並行して扱うような領域の研究を目指している。

II 人間科学研究科の構成と特徴

(1) 研究科の構成

① 本研究科には、生命科学専攻と健康科学専攻の2専攻を置く。

② 大学院（専攻）と学部（学科）との関係

人間科学部の3学科いずれからも大学院の生命科学専攻、健康科学専攻に進むことができる。当然のことであるが、他大学、他学部の卒業生、社会人も受け入れる。

(2) 研究科の特徴

本研究科の2専攻は、以下の事項に重点をおいて研究・教育を行う。

① 生命科学専攻

最近10年間の科学における一つの大きな流れは、生命に関する科学が前面に押し出されて来たことである。新しい観点からの人間という自然像を樹立し、在来 of 専門分化にとらわれない自由な研究を推進するためには、新たな領域として生

命科学を樹立しなければならないという指摘は、すでに昭和51年10月の学術審議会の答申「生命科学の推進について」において行われている。そこでは「生命科学の樹立は、深刻な問題となりつつある環境、食料、資源あるいは人口問題に対処すると共に、人間の生き方に対する判断の基礎となるべき科学的知識を提供するためにも重要な課題となった」という認識が示されている。したがって、ここでいう生命科学は、一方では自然科学系の諸科学との融合をおし進めるかたわら、人間に係わる人文・社会科学との総合化のいとぐちを与える新しい学際的科学として樹立されるべき学問である。

以上のような要請にもとづいて、本研究科の生命科学専攻においては、人間の生存と生活の向上に深く係わる生命と環境との相互作用の解明を目指す。この目的を達成するために生物科学的領域と環境科学的領域からの追求が必要である。

② 健康科学専攻

健康科学専攻の目指すところは、人間の心身の健康の維持・増進である。人間が心身ともに健康な状態を保つには、2つの側面を考えなければならない。その第一は、身体と心の相互作用であり、第二は、人間と環境との相互作用である。このような心身の健康の追求には、さらに生涯発達にともなう心身および環境の変化に対応して、人間発達の各段階に応じた健康の維持・増進という視点を導入しなければならない。

社会における労働形態・生活様式の変化、余暇の増大、高年齢化などに伴って、人間の健康を中心とし、豊かな社会生活を確保するために環境、行動様式、運動能力などへの社会的関心が非常に高まっている。このことは、企業や公共機関、地域等において、それらの分野の知識、能力をもった専門家に対する要請が強いことを意味する。

また近年、健康心理学、環境心理学、行動学、人間工学、生体工学、体力科学などの諸分野についてこれらの問題が積極的に取り上げられ、組み合わせられ、一つの学問領域を形成するまでに発展しつつある。このような学際的学問領域の形成の動向は、心身の相互作用、人間存在と環境の相互作用を総合的にとらえて研究教育を展開することが不可欠である。

III 早稲田大学大学院学則（抜萃）

（設置の目的）

第1条 本大学院は、高度にして専門的な学術の理論および応用を研究、教授し、その深奥を究めて文化の創造、発展と人類の福祉に寄与することを目的とする。

（課 程）

第2条 本大学院に博士課程をおく。

2 博士課程の標準修業年限は、5年とする。

3 博士課程は、これを前期2年、後期3年の課程に区分し、前期2年の課程を、修士課程として取扱うものとする。

4 前項の前期2年の課程は、「修士課程」といい、後期3年の課程は、「博士後期課程」という。

（課程の趣旨）

第3条 博士後期課程は、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力およびその基礎となる豊かな学識を養うものとする。

2 修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力を養うものとする。ただし、高度の専門性を要する職業等に必要な教育を行うことができる。

（教育方法）

第6条 本大学院の教育は、授業科目および学位論文の作成等に対する指導（以下「研究指導」という）によって行うものとする。

（履修方法）

第7条 各研究科における授業科目の内容・単位数および研究指導の内容ならびにこれらの履修方法は各研究科において別に定める。

2 学生の研究指導を担当する教員を指導教員という。

（修士課程の修了要件）

第13条 修士課程の修了要件は、大学院修士課程に2年以上在学し、各研究科の定めるところにより、所要の授業科目について30単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、修士論文の審査および最終試験に合格することとする。

(修士課程の入学資格)

第28条 本大学院の修士課程は、次の各号の一に該当し、かつ、別に定める検定に合格した者について、入学を許可する。

- 一 大学を卒業した者
- 二 外国において通常の課程による16年の学校教育を修了した者
- 三 文部大臣の指定した者
- 四 本大学院において大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者

(在学年数の制限)

第33条 本大学院における在学年数は、修士課程にあつては4年、博士後期課程にあつては6年を超えることはできない。

(休 学)

第34条 病気その他の理由で引続き2ヵ月以上出席することができない者は、休学願書にその理由を付し、保証人連署で所属する研究科の委員長に願い出なければならない。

- 2 休学は当該学年限りとする。ただし、特別の事情がある場合には、引続き休学を許可することがある。この場合、休学の期間は通算し修士課程においては2年、博士後期課程においては3年を超えることはできない。
- 3 休学期間中は、授業料の半額を納めなければならない。
- 4 休学者は、学期の始めでなければ復学することができない。
- 5 休学期間は、在学年数に算入しない。

(任意退学)

第36条 病気その他の事故によって退学しようとする者は、理由を付し、保証人連署で願い出なければならない。

(再 入 学)

第37条 正当な理由で退学した者が、再入学を志願したときは、学年の始めに限り選考の上これを許可することがある。この場合には、既修の授業科目の全部または一部を再び履修させることがある。

(授業料等の納入)

第42条 学生は、授業料表にしたがい授業料、実験演習料等を納めなければならない。

2 納入期日は次の通りとする。ただし、入学または転入学を許可された者が第41条の規定により指定された入学手続き期間内に納める場合は、この限りでない。

第1期分納期日 4月15日まで

第2期分納期日 10月1日まで

(納入学費の取扱)

第43条 すでに納入した授業料およびその他の学費は、事情の如何にかかわらず返還しない。

(中途退学者の学費)

第44条 学年の途中で退学した者でも、その期の学費を納入しなければならない。

(抹 籍)

第45条 学費の納入を怠った者は、抹籍することがある。

(研 修 生)

第51条 第27条から第29条までの規定によらないで、本大学院において授業科目を履修しようとする者または特定課題についての研究指導を受けようとする者があるときは、研修生として入学させることができる。

(研修生の種類)

第52条 官公庁、外国政府、学校、研究機関、民間団体等の委託に基づく者を委託研修生という。

2 前項に定める研修生以外の者を一般研修生という。

(研修生の選考)

第53条 研修生として入学を志願する者については、正規の学生の修学を妨げない限り、選考の上入学を許可する。

IV 早稲田大学学位規則（抜萃）

(目 的)

第1条 この規則は、早稲田大学大学院学則（昭和51年4月1日教務達第1号。

以下「大学院学則」という。）に定めるもののほか、早稲田大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

(学位の種類)

第2条 本大学において授与する学位は、博士および修士とする。(以下略)

(修士学位授与の基準)

第5条 修士の学位は、広い視野に立って精深な学識を修め、専攻分野における研究能力または高度の専門性を要する職業等に必要の高度な能力を有する者に授与するものとする。

(修士学位授与の要件)

第6条 修士の学位は、大学院学則第13条により修士課程を修了した者に授与する。

(課程による者の学位論文の受理)

第7条 本大学院の課程による者の学位論文は、修士課程については2部を、博士後期課程については3部を作成し、それぞれに論文概要書を添えて研究科委員長に提出するものとする。ただし、研究科委員長は、審査に必要な部数の追加を求めることができる。

2 研究科委員長は、前項の学位論文を受理したときは、学位を授与できる者か否かについて研究科委員会の審査に付きなければならない。

(学位論文)

第10条 学位論文は1篇に限る。ただし、参考として、他の論文を添付することができる。

2 前項により、一旦受理した学位論文等は返還しない。

3 審査のため必要があるときには、学位論文の副本、訳文、模型または標本等の資料を提出させることがある。

V 専攻ならびに学科配当表

〔生命科学専攻〕

研究指導

(A群)

分子遺伝学研究指導	教授	理学博士(東大)	飯野徹雄
細胞生物学研究指導	教授	理学博士(東大)	木村一郎
神経生理学研究指導	教授	理学博士(北大)	吉岡亨
神経形態学研究指導	教授	医学博士(九大)	濱清
精神生理学研究指導	教授	医学博士(東邦大)	山崎勝男

(B群)

社会生命科学論研究指導	教授	理学博士(東大)	中村桂子
環境生態学研究指導	教授	理学博士(東大)	大島康行
環境保健学研究指導	教授	保健学博士(東大)	町田和彦
人口学研究指導	教授		嵯峨座晴夫
地域環境論研究指導	教授		柿崎京一
社会の人間発達論研究指導	教授	文学博士(早大)	濱口晴彦

授業科目(演習)

(A群)

分子遺伝学演習(1)(演4)	教授	理学博士(東大)	飯野徹雄
分子遺伝学演習(2)(演4)	教授	理学博士(東大)	飯野徹雄
細胞生物学演習(1)(演4)	教授	理学博士(東大)	木村一郎
細胞生物学演習(2)(演4)	教授	理学博士(東大)	木村一郎
神経生理学演習(1)(演4)	教授	理学博士(北大)	吉岡亨
神経生理学演習(2)(演4)	教授	理学博士(北大)	吉岡亨
神経形態学演習(1)(演4)	教授	医学博士(九大)	濱清
神経形態学演習(2)(演4)	教授	医学博士(九大)	濱清
精神生理学演習(1)(演4)	教授	医学博士(東邦大)	山崎勝男
精神生理学演習(2)(演4)	教授	医学博士(東邦大)	山崎勝男

(B群)

社会生命科学論演習(1)(演4)	教授	理学博士(東大)	中村桂子
社会生命科学論演習(2)(演4)	教授	理学博士(東大)	中村桂子
環境生態学演習(1)(演4)	教授	理学博士(東大)	大島康行
環境生態学演習(2)(演4)	教授	理学博士(東大)	大島康行

環境保健学演習(1)(演4)教授	保健学博士(東大)	町田和彦
環境保健学演習(2)(演4)教授	保健学博士(東大)	町田和彦
人口学演習(1)(演4)教授		嵯峨座晴夫
人口学演習(2)(演4)教授		嵯峨座晴夫
地域環境論演習(1)(演4)教授		柿崎京一
地域環境論演習(2)(演4)教授		柿崎京一
社会の人間発達論演習(1)(演4)教授	文学博士(早大)	濱口晴彦
社会の人間発達論演習(2)(演4)教授	文学博士(早大)	濱口晴彦

授業科目(選択必修科目)

生物物理学特論(講4)教授	理学博士(北大)	吉岡亨
生理学特論(講4)講師	医学博士(東大)	川合述史
神経薬理学(講4)講師	工学博士(京大)	三品昌美
生化学特論(講4)講師	医学博士(東大)	高井克治
神経遺伝学(講4)講師	医学博士(東大)	堀田凱樹
神経行動学(講4)助教授	医学博士(順天堂大)	山内兄人
免疫学(講4)講師	医学博士(東大)	狩野恭一
人間生物学特論(講4)講師	理学博士(名古屋大)	江口吾朗
エントロピー論(講4)教授	理学博士(阪大)	鈴木英雄
老年学特論(講4)(前期)講師	医学博士(東京慈恵医大)	柄澤昭秀
老年学特論(講4)(後期)教授		嵯峨座晴夫
人類学特論(講4)講師	医学博士(東大)	保志宏
自然環境論(講4)講師	理学博士(東京教育大)	和田英太郎
福祉援助特論(講4)教授	文学博士(早大)	岡野静二

〔健康科学専攻〕

研究指導

(A群)

生体機能工学研究指導	教授	工学博士(東北大)	比企静雄
体力科学研究指導	教授	医学博士(横浜市立大)	永田晟
栄養学研究指導	教授	医学博士(東邦大)	太田富貴雄
トレーニング論研究指導	教授		窪田登
コーチング論研究指導	教授		日比野弘
行動臨床心理学研究指導	助教授	教育学博士(筑波大)	坂野雄二
学校臨床心理学研究指導	教授		小泉英二

(B群)

行動学研究指導	教授	文学博士 (早大)	春 木 豊
環境心理学研究指導	教授	文学博士 (早大)	相 馬 一 郎
発達心理学研究指導	教授	文学博士 (広島大)	山 本 多喜司
人間工学研究指導	教授	工学博士 (慶大)	野 呂 影 勇
評価・測定理論研究指導	教授	医学博士 (神戸医科大)	浅 井 邦 二
安全管理医学研究指導	教授	医学博士 (北大)	黒 田 勲

授業科目 (演習)

(A群)

生体機能工学演習(1)	教授	工学博士 (東北大)	比 企 静 雄
生体機能工学演習(2)	教授	工学博士 (東北大)	比 企 静 雄
体力科学演習(1)	教授	医学博士 (横浜市立大)	永 田 晟
体力科学演習(2)	教授	医学博士 (横浜市立大)	永 田 晟
栄養学演習(1)	教授	医学博士 (東邦大)	大 田 富貴夫
栄養学演習(2)	教授	医学博士 (東邦大)	大 田 富貴夫
トレーニング論演習(1)	教授		窪 田 登
トレーニング論演習(2)	教授		窪 田 登
コーチング論演習(1)	教授		日比野 弘
コーチング論演習(2)	教授		日比野 弘
行動臨床心理学演習(1)	助教授	教育学博士 (筑波大)	坂 野 雄 二
行動臨床心理学演習(2)	助教授	教育学博士 (筑波大)	坂 野 雄 二
学校臨床心理学演習(1)	教授		小 泉 英 二
学校臨床心理学演習(2)	教授		小 泉 英 二

(B群)

行動学演習(1)	教授	文学博士 (早大)	春 木 豊
行動学演習(2)	教授	文学博士 (早大)	春 木 豊
環境心理学演習(1)	教授	文学博士 (早大)	相 馬 一 郎
環境心理学演習(2)	教授	文学博士 (早大)	相 馬 一 郎
発達心理学演習(1)	教授	文学博士 (広島大)	山 本 多喜司
発達心理学演習(2)	教授	文学博士 (広島大)	山 本 多喜司
人間工学演習(1)	教授	工学博士 (慶大)	野 呂 影 勇
人間工学演習(2)	教授	工学博士 (慶大)	野 呂 影 勇
評価・測定理論演習(1)	教授	医学博士 (神戸医科大)	浅 井 邦 二
評価・測定理論演習(2)	教授	医学博士 (神戸医科大)	浅 井 邦 二
安全管理医学演習(1)	教授	医学博士 (北大)	黒 田 勲
安全管理医学演習(2)	教授	医学博士 (北大)	黒 田 勲

臨床心理学特論(講4)助教授	教育学博士(九大)	門前進
環境認知学特論(講4)教授		佐古順彦
性格心理学特論(講4)教授		富田正利
教育工学特論(講4)助教授		野嶋栄一郎
人間工学特論(講4)助教授		石田敏郎
スポーツ医学特論(講4)講師		福林徹
行動医学特論(講4)講師	医学博士(東大)	久保木富房
認知科学特論(講4)講師	心理学博士(ワシントン大)	佐伯胖
視覚工学特論(講4)講師	医学博士(福島県立医大)	斉藤進

授業科目(両専攻共通選択科目)

人間科学特論(講4)教授	文学博士(早大)	濱口晴彦
生命科学概論(講4)教授	理学博士(東大)	中村桂子
精神生理学概論(講4)教授	医学博士(東邦大)	山崎勝男
バイオエシックス(講4)教授		木村利人
精神測定法(講4)教授	医学博士(東神戸医科大)	浅井邦二

VI 演習および講義の概要

1. 生命科学専攻

分子遺伝学演習(1)

教授 飯 野 徹 雄

分子遺伝学の発展の基礎となった研究分野の総説および論文の、分担講読ならびに相互討論を通じて、分子遺伝学の生命科学における意義を理解させると共に、分子遺伝学の現状と今後の展開の方向とを把握させる。

分子遺伝学演習(2)

教授 飯 野 徹 雄

修士研究課題と関連した分子遺伝学分野の、原著論文および総説を中心として、分担講読ならびに相互討論を行い、分子遺伝学の先端分野の研究動向を理解させると共に、その流れの中における修士研究の学問的位置づけを把握させる。

細胞生物学演習(1)

教授 木 村 一 郎

生物体の構造と機能の単位である細胞に関する研究が近年飛躍的に進歩して、新しい情報が続々と得られ、今や細胞生物学は生物学、医学の中心分野となりつつある。細胞生物学は、文字通り「細胞」を研究する分野であるが、現在では生理学、遺伝学、形態学、発生学、免疫学、さらには進化学といった旧来の生物学の諸分野を広く包含するものとなっている。

本演習では、このような細胞生物学における諸概念と基本的な考え方、およびそれらを支持する実験的根拠について総括的に学ぶ。教科書、参考書等については、演習の中で指示する。

細胞生物学演習(2)

教授 木 村 一 郎

1年次の「細胞生物学演習(1)」を基礎に、より高度な内容に関するもの、最新の研究成果等について、原書、原著の講読を中心にしながら各論的に扱う演習とする。

神経生理学演習(1)

教授 吉 岡 亨

神経生理学はこれまで電気生理学が中心となってリードして来た学問分野である。しかしながらこの10年間でその内容は著しく変貌し、分子生物学、薬理学、生化学を含む巨大なサイエンスへと成長して来た。そこで本演習では次のような項目にしたがって文献講読を中心に進める。

- (1) ニューロンの生理学
- (2) シナプスの形成とインパルスの伝達
- (3) 細胞内 Ca とその調節機構

文献については最新のものを選んで用いる。参考書としては以下のものが望ましい。

- (1) “From Neuron to Brain”, S.W. Kuffler 著
Sinauer Associates Inc. 社出版
- (2) “Intracellular Calcium”, A.K. Campbell 著
John Wiley & Sons Ltd. 社出版

神経生理学演習(2)

教授 吉 岡 亨

「神経生理学演習(1)」に引き続いて行う。主な内容はニューロン内における情報伝達機構を中心とし脳の高次機能解明を睨んだものになる。

- (1) イオンチャンネルの構造と機能
- (2) セカンドメッセンジャーとタンパク質のリン酸化反応
- (3) 学習と記憶の基礎過程

演習は最新の文献を中心にして行う。参考書については、その都度指示する。この演習に参加するものは1年次に於て、生理学特論、神経遺伝学、エントロピー論を受講しておくことが望ましい。

神経形態学演習(1)

教授 濱 清

脳神経系の機能を理解するためには、その構成要素であるニューロン及びグリア細胞の構造の正確な知識が必要である。

この演習では、ニューロンとグリア細胞の構造を主として微細構造のレベルで検討しその機能との関連を考える。

取り上げる対象としては、1) 神経系の発生と形態形成におけるニューロンと

グリア細胞の関係, 2) ニューロンの細胞生物学, 3) シナプスの微細構造と機能との関係, 4) グリア細胞の細胞生物学, 5) 感覚受容器の微細構造と機能など。

この演習を通じて神経系の微細構造とその機能的な意味についての基本的な知識を修得することを目的とする。

テキスト: The Fine Structure of The Nervous System: The Neurons and Supporting Cells: Peters, Palay, Webster: W.B.Saunders Co. 1976.

Principles of Neural Science: Kandel, Schwartz: Elsevier, 1985.

神経形態学演習(2)

教授 濱 清

脳神経系の機能はニューロン及びグリア細胞を構成する生体分子のレベルから、細胞小器官、細胞、さらに組織のレベルに至るまでその形態と深い係わりを持っている。従って脳神経系の機能を理解するためには、常に生化学的、生理学的、形態学的な視点から問題を把握する習練が必要である。

この演習では、新着の学術雑誌の論文から、ニューロンおよびグリア細胞の細胞生物学に関係ある論文を選び、論読の形式で勉強して行く。この演習の目的は神経科学の分野での今日的な問題に広く接して理解を進める事にある。

精神生理学演習(1)

教授 山 崎 勝 男

精神生理学は人間行動の諸側面を、心理学と生理学の学際的な立場から追究し、両者の対性を解明する学問である。当演習ではこの学問領域の理解を深めるために、方法論を含めた基礎的なモデル実験から生理的指標の測定法を修得し、同時に関連領域の代表的な論文を熟読して、この学問の位置づけを明確にする。実験的な色彩の濃い演習となる。

精神生理学演習(2)

教授 山 崎 勝 男

「精神生理学演習(1)」で習得した基本事項をさらに深く追求し、この研究領域の主要テーマである生体リズム、精神疲労、夜間睡眠の諸相、注意と事象関連電位、脳機能の左右差等についての広範な文献研究から、現在の研究動向を探る。

社会生命科学論演習(1)

教授 中 村 桂 子

「人間は生きものである」という立場から生命現象の理解の上に立って、社会問題を考える。具体的には、「生物に学ぶ」という観点から、科学技術のあり方、環境問題などをテーマにして文献調査、CP リングなどを基にした調査研究とそれを素材にしてのグループ・ディスカッションを行なう。

技術および産業として、とくにとりあげるのは、農業、環境保全や創造の技術などである。現在、大きな問題になっている地球環境問題も単なる科学的知見、技術的解決を求めるのではなく、「人間は生きもの」という視点から総合的解決を探る。

社会生命科学論演習(2)

教授 中 村 桂 子

「人間は生きものである」という立場から生命現象の理解の上に立って、社会問題を考える。具体的には、「生物に学ぶ」という観点から、科学技術のあり方、環境問題などをテーマにして文献調査、CP リングなどを基にした調査研究とそれを素材にしてのグループ・ディスカッションを行なう。

具体的テーマは、「社会生命科学論演習(1)」の延長上でとりあげるので、第一は、地球環境問題となる。これは、人間と自然と科学技術の問題の本質を問う問題であるので、「社会生命科学論演習(1)」より深めた議論をする。第二のテーマは、教育である。

環境生態学演習(1)

教授 大 島 康 行

最近のめざましい生態学の進歩と環境科学の進展をふまえつつ、生態学の基礎的諸問題を論議し知見を深めていく。そのなかで人間と環境との関係の理解を深めていく。また、各自の研究テーマにかかわる諸問題も上記の視点から論議したい。

環境生態学演習(2)

教授 大 島 康 行

「環境生態学演習(1)」で得た知見と理解を基礎に環境問題をとくに人間とのかかわりのなかで理解を深め、各自の研究テーマの発展とのかかわりのなかで演習

を進めていく。local, regional, および global な問題を総合的に関連させながら論議を深めたい。

環境保健学演習(1)

教授 町 田 和 彦

本演習は人間をとりまく広範囲の環境がヒトの疾病の予防と健康の維持・増進に及ぼす影響を調査・実験・データ解析等多面的視点から研究していくための基本的理解と実際的方法の修得をめざすものである。そのためには病原因子および環境側因子としての環境科学, 生気象学, 微生物学, 人類生態学, 保健社会学等, 又宿主側要因としてのヒトの構造と機能と疾病, 生体の防御機構(免疫学)加齢に伴う生体の変化, 体力の保持・増進, 栄養学・体力医学等の各要因に対して理解を深める必要がある。

そこで, 「環境保健学演習(1)」ではこれらの要因に対して学習していくことを目的とし, これら要因に関する講義とそれに対するディスカッションを中心にしておこなっていく。

環境保健学演習(2)

教授 町 田 和 彦

「環境保健学演習(1)」で環境保健学の基礎的理解をしたうえで, 今度は各自の行っている研究テーマ, 又はそれに関連する周辺領域の論文の発表会と実際に各自の行っている研究の検討会を中心とする。この演習では保健学(衛生学・公衆衛生学)関連分野の研究および学習をしている学内外の参加者を交え, より高度な研究能力の育成をはかっていくことを目的とする。

人口学演習(1)

教授 嵯峨座 晴 夫

人口学, 主として人口現象の分析方法を研究する形式人口学の分野と, 人口変数とその他の社会経済的変数の相互関係を研究する人口研究の分野からなっている。この演習では前者に重点をおき, 人口分析の方法について実際のデータを用いて実習する。参考文献や人口データについては, そのつど指示する。

人口学演習(2)

教授 嵯峨座 晴 夫

この演習では, 「人口学演習(1)」で学んだ人口分析の手法を実際の人口研究の分

野に応用していく。ここでは、いわゆる人口問題といわれている諸問題を取りあげ、それらの概観を行い、今日的意義を明らかにする。そのようにして人口問題についての全般的見通しをもったうえで、後半においては、今日もっとも重要な問題となっている地球環境の問題を取りあげ、人口との関連に着目してその相互依存関係のメカニズムについて考察する。

地域環境論演習(1)

教授 柿崎 京一

自然環境システムに適合的に機能していたかつての農林漁業の存在が、いまあらためて問われている。そこには、自然環境保護といったグローバルな問題関心とは必ずしも同一の論理に立つものではない、生活者の立場からの環境問題に対する危機感がある。本演習では、この生活者の日常的な知、生活意識に基づく生活環境論についての文献講読を行う。また、この講読と並行して、現地調査を通じて具体的データに基づき理解を深めたい。

地域環境論演習(2)

教授 柿崎 京一

本演習では「地域環境論演習(1)」の継続として、地域生活者、具体的には農林漁業者の生活意識の遂行の装置としての生活組織、ひいては村落社会の分析をとおして、生活環境維持機構としての地域社会の構造と機能について再検討する。換言すれば、既存の地域社会論について、生活環境論的視点から再編成を考えることである。文献講読と現地調査を併用して行う。

社会的人間発達論演習(1)

教授 濱口 晴彦

A. 環境と人間——自然環境と人間との共生、あるいは人間集団（家族、企業、地域・社会、その他のアソシエーション）との共存関係について——Eco-Sociology

B. 人間と加齢・寿命——人は環境とかかわりをもち社会をつくる。その社会を構成する人間の加齢（エイジング）が社会環境の1つの要素として重要視されている。いわゆる高齢化社会、大衆長寿時代の家族や企業、雇用、地域社会の問題について——Social Gerontology

C. 加齢・寿命と生き方——高齢化社会とそこに生きるものの文化や価値観、その変化について——Creative Sociology

という3つの学際領域を自然と人間と社会の相互交流の問題として社会学，社会老年学，発達論の方法とコンセプト（生活の質）にもとづいて検討し，実証的に把握することを通して，公共政策の確立に資することを目指す。

社会的人間発達論演習(2)

教授 濱 口 晴 彦

「社会的人間発達論演習(1)に同じ

生物物理学特論

教授 吉 岡 亨

生物の示す様々な機能，例えば筋肉の運動，神経情報の伝達，生物の発生，情報処理，などを分子レベルで考察する時，物質を中心に展開する生化学に対して，分子間の相互作用を中心に展開する分野が生物物理学である。

ここではそのような考え方をベースに，脳の高次機能や感覚受容，さらに脳発生といった現代生物学の中心課題を重点的に取り扱う。

生理学特論

講師 川 合 述 史

人体の生理機能のうち，特に神経系の果す役割について講義を行う。中心をシナプス伝達機能におき以下の項目について講義を行う。

- (1) 神経筋接合部におけるシナプスの伝達
- (2) 中枢神経系におけるシナプス伝達と神経回路網
- (3) シナプス伝達に関連する化学伝達物質と受容体の種類とその分子機構
- (4) 可塑性シナプスと脳高次機能との関連

神経薬理学

講師 三 品 昌 美

神経系に作用する薬物がどのような機構で効果を表わすかについて詳細に論ずる。

中枢神経の細胞には，ホルモンレセプターや神経伝達物質のレセプターが数多く知られている。これらのレセプターに薬物が作用すると細胞内情報伝達系が働き，細胞特有の応答を示す。本構では

- (1) レセプターの構造
- (2) レセプターの機能

(3) 機能を制御する分子機構

に焦点を絞り、これまで明らかになった事実と今後に残された諸問題につき論ずる。

生化学特論

講師 高井 克治

生化学は、生命現象を物質レベルで明らかにしてゆく学問である。なかでも酵素の働きは最も重要であり、そのメカニズムについての理解は急速に進展している。

ここでは急速に発展している、酵素を中心とした生化学研究の現状を紹介しながら、特に脳や神経に局在する酵素に関する最近のトピックスにも目を向けて、その問題点などを論ずる。

神経遺伝学

講師 堀田 凱樹

生体の最も高次の構造である神経系も、その基本は DNA に描かれた遺伝情報にしたがって形成され機能している。本講義ではその神経系の構造と機能に関連する遺伝子とその作用機構について述べる。特にショウジョウバエ・線虫・マウスなど、神経遺伝学の重要な研究材料について解説し、初期胚におけるニューロブラストの分化から、成体における学習・記憶等の高次中枢機能までを、いかに遺伝子が支配しているかを考察する。

神経行動学

助教授 山内 兄人

哺乳類の行動には様々なものがあるが基本的には個体の生命を維持する為の摂食行動、飲水行動、攻撃行動、子孫を残す為に生殖に関与する性行動や母性行動など、一般に本能行動と呼ばれているものよりなる。複雑化したヒトの行動においても根底にはこのような行動がある事を知らなければならない。これらの行動は中枢神経系（脳と脊髄）に制御機構が存在し、その機構は感覚器——末梢神経系から伝わる外的環境からの刺激や、ホルモンなどの因子により内的環境からの刺激をうけ、それらの情報を統御して筋肉に運動情報をおくる事で行動を発現させる。この講義では中枢神経系にそれらの行動がどの様に発達しどの様に働いているのか考えていきたい。

免疫学

講師 狩野 恭一

現代免疫学の理解のためには、関連諸科学特に生化学と分子生物学の基礎的知識が必要である。さらに免疫学固有のコンセプトやそれらの由来した歴史的背景を知ることが前提となる。従って講義内容の主なものは次の如くである。

1. 免疫学の史的展望：前世紀末の病原細菌学の一分科として生まれ、血清学から免疫化学への発展、さらに免疫生物学の時代を経て分子生物学への展開のプロセスを辿る。

2. 免疫学のコンセプト：獲得免疫、さらに免疫学的特異性、抗体産生、トランス等のコンセプトの理解を深める。

3. 現代免疫学の問題点：免疫反応の最も根元的なエレメントである MHC およびその機能、細胞・臓器移植免疫および自己免疫の仕組みとその医学生物学的意義について解説する。

人間生物学特論

講師 江口 吾朗

人間は生物学的にはヒト (*Homo sapiens*) と名づけられ、ひとつの生物種を構成しているが、他の生物種に大きく依存し、地球環境に変化を及ぼしながら発展を遂げてきた。しかし、ヒトはその祖先動物から進化してわずか何百万年の時間しか経ていないのに、集団として人類が変更を加えてきた地球環境の悪化によって、自らの生存すらあやうくしようとしている。本講義では、人類が他の生物と地球環境を分ち合い末永く生きていくために、より正しく深く“生き物”を理解する必要があるとの見地から下記について講究する。

- 生物学の歴史的展開
- 生物学と人間社会との関係
- 一生物種としてのヒトという動物の特性
- 動物の発生とヒトの発生
- 個体発生とがんとの接点
- 生物学と応用科学として医学・農学など
- 生物学が目ざすべきこと

エントロピー論

教授 鈴木 英雄

現代社会では、人間における身心の歪、社会におけるストレスの増大、資源・エネルギーの欠乏、環境の異常、生態系の変動など、人類の生存に係わる問題が、人口の増加や技術の発達に伴って続出している。このような事態は、我々がこれまで信奉してきた「物質・エネルギー万能主義」と、決して無縁ではない。そこで本講義では、この物質・エネルギーの動態を規定している「エントロピーの法則」を念頭において、今後の人類の生存に不可欠な「新しい世界観」を、次のような順序で論じてみたい。

1. エントロピーとその法則
2. 生命の論理とエントロピーの法則
3. 世界観の変遷とエネルギー環境
4. 技術革新の実体とその問題点
5. 経済学とエントロピー法則
6. 人類の未来とエントロピー法則（エネルギー問題、経済理論、社会制度、宗教・哲学・科学などについて）

老年学特論（前期）

講師 柄澤 昭 秀

老年期の心理と精神医学

この分野は比較的新しい学問領域であるが、近年大きく前進している。ここでこれまでに得られた知識を整理して問題点を明らかにし、今後の発展の基礎としたい。

- I. 老年学の基礎
 1. 老年学の歴史
 2. 老年と老化の概念
 3. 老年者の生活実態（寿命、人口、健康など）
- II. 超高齢者における心身の機能
（老化の究極における心身機能）
- III. 老年期の心理
 1. 認知機能に対する加齢の影響
 2. パーソナリティに対する加齢の影響

3. 老年期における適応

IV. 老年期の精神医学

1. 老年期の異常心理 (精神病理学)

2. 精神医学的診断と治療

3. 主な精神障害とその特徴

4. 老年期の精神保健

老年学特論 (後期)

教授 嵯峨座 晴 夫

老年学はエイジング (加齢, 老化, 高齢化) を研究対象としており, それへのアプローチには生物学的, 医学的, 心理学的, 社会学的なものなど, さまざまなアプローチがある。ここでは, そのうち社会学的な視的からのエイジングの研究, すなわち社会老年学について講述する。テキストとして次を用いる。

Robert C. Atchley, Social Forces and Aging; An Introduction to Social Gerontology, Fifth edition, 1988.

人類学特論

講師 保 志 宏

人類進化学 ヒトでないものから如何にしてヒトが生じたのか。どのような特徴が揃えばヒトと呼ぶことができるのか。ヒトらしきものが現れてから今日のわれわれまでにどのような変化があったのか, そのような変化はなぜ生じたのか。これらのことを, 身体移動様式, ソシヤク器官, 脳の3つの角度から考察する。

人類遺伝学 ヒトを含む動物集団の変化の法則に迫る。

人類生態学 ヒトと「ヒト特異環境 (自然環境と文化環境)」との相互関係を解明しようとする新しい分野を展望したい。

自然環境論

講師 和 田 英太郎

光合成植物の誕生は38億年前である。無限にある太陽エネルギー, 水, 炭酸ガスを使って, 永続的な有機物の生産が可能となり, 18億年かかって, C-O-Fe-S サイクルがほぼ完成した。高等動物の出現は生元素循環系が完成した後である。その進化の戦略は, 物質循環系の生産物 (有機物と酸素) を享受することによっ

て、その機能を向上させることであった。この物質循環系発展の歴史から、地球・植物・動物・バクテリア各々の位置づけと、役割りを学び取ることができる。

本講義ではこの点に視点を置き、生元素系の進化、環境問題の歴史と現状、生元素安定同位体の生物地球化学 (Isotopically Ordered World) について論義し、新しい視点から地球と生物圏の理解を深めたい。

キーワード：生物圏、生元素系、進化、地球環境問題、窒素・炭素安定同位体比、ニュー・パラダイム。

福祉援助特論

教授 岡 野 静 二

福祉援助論とは、ボランティア活動論のことである。しかし社会的にも政策的にも有益であるとされる仕事に、時間と能力を無償で提供する活動が、ボランティア活動である。と言ってしまうと、世のボランティア活動を説明することはできる。それでは社会制度として深くほりさげることもできず、また生物学的知見、医学的知見を無視することになろう。たとえそれらを無視しなくとも、それらを関連づける仕方をしないであらう。

福祉を生命科学として構成するメカニズムを理解させ、個体の発生から成長老化までの生涯発達の過程を、生物学的に、また社会の中で見てゆくことにおいて、現代に問題になっている老人問題、婦人生活問題、児童問題、障害者問題及び様々な福祉にかかわる問題を、自然環境、神経、人口問題などとも結びつけることもできる。学生には、その全体像を理解させ、その中から、次第に一つのテーマを、しほりこんでゆくように指導したい。

2. 健康科学専攻

生体機能工学演習(1)

教授 比 企 静 雄

生体のもつ種々な機能を工学的な多様な研究の手法を使って解明するとともに、得られた知見を関連する分野に多面的に応用することを目的とする生体工学の分野での研究のうちで、この「生体機能工学演習(1)」では、次のような領域を予定している。

[A] 人間の視覚・聴覚・触覚などの感覚機能の特性についての基礎的な研究と、文字・音声の人工的認識・合成や、視覚・聴覚障害に対する言語情報の伝達の補助手段のような、人間工学や教育工学や医用工学やリハビリテーション工学なども重なり合う分野への応用を扱う。

[B] 人間の運動機能を計測・解析する手法、とくに、電子計算機の利用による測定データの処理や画像解析や運動のシュミレーションのためのモデル化などについて、バイオメカニクス的な基礎的な考察をしたうえで、それらの手法をスポーツ障害の防止へ適用するという立場から、スポーツ工学の諸問題についても取り上げる。

生体機能工学演習(2)

教授 比 企 静 雄

「生体機能工学演習(2)」では、人間の感覚機能や運動機能について、「生体機能工学演習(1)」で扱うような基礎から応用までの研究の領域を、さらに発展させていく。

[A] 感覚機能については、人間と人間あるいは人間と動物や機械との相互の意思伝達の種々な可能性を含む、人間の感覚情報処理の全般的な問題にまで領域を拡張する。

[B] 運動機能についても、スポーツ障害を対象とした機能回復訓練の研究を、一般的な運動機能の向上のための効率の良い訓練方法というような、スポーツ全般にわたる研究課題に還元する。

生体機能工学演習の(1)と(2)を通して、このような範囲内で年度によって適当な項目を選んで、講義・実習・見学などを組み合わせて学習を進める予定である。なお、所沢スポーツホールのリハビリテーション室でのスポーツ障害の検査と機

能回復訓練のプログラムも、この生体機能工学演習に取り入れる。

体力科学演習(1)

教授 永 田 晟

体力を競技体力と健康体力に区分する。それぞれの目的は異なるが、Human performance と Human resources の向上と保持を志向する。体力の定義は異なっても、その向上と保持の方法並びに身体としての機械は同じである。体力を科学することは人間を追求し、その存在を知ることでもある。体力を科学する信頼できる研究方法を教授し、その方法を具体的に応用実践する。

一種目のスポーツを取り上げ、それを科学する方法とその体力向上策を考え、実際に体力向上データを抽出し、身体の機構とともに一般的な体力向上理論を構築していく。具体的に理論を応用することが大切で、体力科学のスペシャリストとしての知識と資格を取得する。一例として公共企業体や会社における従業員の健康体力管理者や安全衛生管理者の知識と資質を学習する。またエリート・スポーツ人の体力にも関心をよせて、スポーツ・トレーナーやインストラクターの専門性を教授し、スポーツ・リーダーの資格を得るように配慮する。

体力科学演習(2)

教授 永 田 晟

「体力科学演習(1)」の学習に基づいて、諸外国の体力科学や開発状態を調査し、紹介する。そのために多くの外国論文を読み、諸外国のスポーツ状況を把握して、機能の向上と保持の実態を国際的に知る。独創性の高い論文がまとめられるように体力科学上の問題点や仮説を立てていく。その後に妥当な実験方法を作成し、信頼性の高いデータを得ていく。さらにスポーツ医学上のデータについても考察をより詳しく行えるように、他の報告データと比較できる能力を教授する。実際に実験をおこない、実際のスポーツ現象を忠実に記録していくことが大切である。それを外国語に翻訳し、国際学会や外国機関紙にて発表する能力を陶冶していく。体力科学とスポーツ医学や人間性との関連を追究し、総合的な人間科学の一分野を構築していく意図をもっている。そのための専門家としての教育を実施し、社会生活に貢献可能な国際人を育成していく場でもある。体力科学の論文を書く能力は必須のことである。

栄養学演習(1)

教授 太 田 富貴雄

栄養学は、食物成分や食事の摂り方が生体の諸機能に与える影響を分子から個体レベルに至るまで追究することにより、個人が先天的あるいは後天的に獲得した好ましい能力を最大限に発揮させ、また健康で活動的な一生を送るための食生活の指針づくりを目指す応用生物科学である。本演習では、体力・競技力の向上を図るスポーツ栄養、食生活と運動が健康の維持・増進に果たす相互作用、食習慣と性格ないし behavior 関係、の3課題を重点的に取り上げ、関連原著論文の検索および発表・討論等の活動を通じて、専門知識を深めまた最近の研究動向を把握するとともに、判断力と研究の進め方や研究手法をも身につける狙いがある。新しい測定手法の紹介にあたっては可能な限り実習を取り入れたい。

栄養学演習(2)

教授 太 田 富貴雄

栄養学は、食物や運動等の外的環境が生体の諸機能にどのような影響を与えるかを実験あるいは疫学的調査を通じて観察し、その結果をもとに健康・体力の増進さらには各種疫病の予防と治療のための至適栄養摂取量を明らかにする目的を有している。この目的を達成するためには単に現象面の把握にとどまらず、その根底にある共通のメカニズムを解明し、生命活動の一環として一般化する必要があることは言うまでもない。本演習では、英文のテキスト(例: Reviews of Physiological Chemistry)や総説の講読と関連事項の討論を通じて、栄養現象に関わる機構解明に際して不可欠な知識である、栄養素の代謝とその調節の仕組みについて学習する。また、近年疾病予防の観点から世の関心を集めている機能性食品の生理作用についても、文献資料に基づく考察と検討を行いたい。

トレーニング論演習(1)

教授 窪 田 登

体力は筋力、持久力、柔軟性をはじめとする諸々の因子でもって構成されている。本科目では、体力強化に必要な理論と実技を学習していく。

主として、筋力強化のための isometrics, isotonic, 持久力養成のための各種トレーニング法、柔軟性養成のための dynamic および static な stretching について、一般人指導をテーマとした形で学習を進めていきたい。

トレーニング論演習(2)

教授 窪 田 登

「トレーニング論演習(1)」を基礎にして、体力トレーニングの理論と実技の内容をより高めていくと同時に、スポーツ選手へのこれらトレーニングの適用法について、学習をしていきたい。

コーチング論演習(1)

教授 日比野 弘

コーチングとは、プレーヤーが目標を達成するために、具体的な方法を明示し、実践させることである。コーチはそれぞれのスポーツにおける理論とルールに精通し、説得力ある強化のための方策をもたなければならない。

この演習では、実践的なコーチング論を研究し、優れたコーチになるための基盤を作りあげることが目的とする。

コーチング論演習(2)

教授 日比野 弘

「コーチング論演習(1)」で学んだことをもとに、各自がコーチング実践の場を持ち、研究の成果を発表する。事例に学びながら、研究討議を重ね、より高度な、より幅の広いコーチング能力を身につけると共に、各自のコーチング論を確立することを目的とする。

行動臨床心理学演習(1)

助教授 坂 野 雄 二

認知行動療法に関する最近の研究を中心として取り上げ、

- (1) 不安とその対処
- (2) ストレスとその対処
- (3) 感情と行動障害
- (4) 治療教育
- (5) 健康と精神衛生管理

等の問題について、その原理と方法論を理論的に探り、症例の検討を通してその実際を演習する。それを通して、健康科学という視点から捉えた科学的な臨床心理学を追究する。

テキストブック、参考文献等は追って指示する。

行動臨床心理学演習(2)

助教授 坂 野 雄 二

行動臨床心理学の具体的な介入の仕方について、症例の検討を中心に演習を行う。領域としては、不安、ストレス、感情と行動障害、治療教育、健康と精神衛生管理等を取り上げ、単に「治療」という観点のみならず、「予防」、「セルフコントロール」、「健康管理」、「教育」という観点から、その実際について学ぶ。

必要に応じて実際の事例を取り扱う。そのため、授業時間外に演習を行うこともある。テキストブック、参考資料等は追って指示する。

学校臨床心理学演習(1)

教授 小 泉 英 二

教育相談機関で行っている通所相談の実際と問題を、事例研究やケースカンファレンスを通して学習する。すなわち、受理面接、臨床心理査定、心理療法、絡結、予後調査など、相談のプロセスに即して方法および問題を具体的なケースを通して学ぶと共に、学校への援助と提携のあり方を検討する。

学校臨床心理学演習(2)

教授 小 泉 英 二

受講者各自の持つ研究テーマを勘案しつつ、年間カリキュラムを編成するが、特に臨床心理学的地域援助や学校コンサルテーションなど、広く社会資源の活用と提携という立場に立って、学校教育相談体制の確立をはかるための調査や試案の提供を試みたい。

行動学演習(1)

教授 春 木 豊

「行動」に関わるテーマを取り上げ文献研究を行う。テーマ、文献については、受講者と協議の上決定する。

行動学演習(2)

教授 春 木 豊

「健康行動」に関わるテーマを取り上げ、文献（又は著書）研究を行う。テーマ、文献（著書）については、受講者と協議の上決定する。

環境心理学演習(1)

教授 相 馬 一 郎

人間と環境の係わり合いを課題とする。演習においては、これに関連する文献

講読を中心とする。

環境心理学演習(2)

教授 相 馬 一 郎

人間と環境の関わりあいを具体的事例をも含め検討する。

発達心理学演習(1)

教授 山 本 多喜司

従来の発達心理学は、子ども期から青年期までに限定され、しかも個体の成長・発達の年齢的变化を中心に研究されてきた。生涯発達心理学 (life-span developmental psychology) は、人間の受胎からはじまり成人期・高齢期を含めた全生涯に起きるすべての発達の变化を対象とすべきである。発達に及ぼす影響も年齢要因だけではなく、社会・歴史的要因 (cohort) 及び非標準的 (non-normative) 要因、個人ごとの生活経験の要因の三者の相互作用の結果として考えなければならない。

このような視点に立って人間——環境相互交流 (Person-environment transaction) の過程を理解するため内外の文献を講読・討議する。

発達心理学演習(2)

教授 山 本 多喜司

「発達心理学演習(1)」に続いて、生涯発達心理学の視点から人生移行 (life transition) の発達に関する内外の文献を講読・討議する。中心的テーマは生涯生活の中で生じる危機的人間——環境移行 (critical person-environment transition) である。「発達心理学演習(1)」のアドバンスコースと理解されたい。

人間工学演習(1)

教授 野 呂 影 勇

ファジー推論モデル、拡張型交流分析、眼球運動の測定による認知モデルの構築、人体の形態的シュミレーションなどを通じて、人間工学の高度な研究に必要な技術の演習を行う。

人間工学演習(2)

教授 野 呂 影 勇

仮想現実空間の作成技術の習得にはじまり、創造した空間における人間の行動、認知行動、空間の評価等を行い、仮想現実空間における高度なマン・オブジェクト

トコミュニケーションモデルの最適化についての演習を行う。

評価・測定理論演習(1)

教授 浅井 邦 二

本年度は、心理検査に関する文献をとりあげ輪読し、評価・測定の問題について考察したい。

評価・測定理論演習(2)

教授 浅井 邦 二

評価・測定に関する実践場面における具体的問題に理論的考察を加える形で、参加者が取り上げるテーマに従って検討を進めたい。

安全管理医学演習(1)

教授 黒 田 勲

安全に関連する人間行動のメカニズムを理解するため、諸種の人間振舞モデルの比較検討を行う。

モデルに従って、ヒューマン・ファクター所在位置の分析方法、その実際の適用方法、ヒューマン・ファクターに主点を置いた事故調査方法の検討、人的信頼性の定量化方法、そのデータベース作成のための実験を行う。パフォーマンス形成因子の影響度とその形態、相互依存度の見直し、協同作業におけるコミュニケーションの問題について研究を進める。

安全管理医学演習(2)

教授 黒 田 勲

機械、設備等のハードウェアの安全評価との関連性において、ヒューマン・ファクターの位置付け、システム安全としての総合的考え方を基礎として、安全管理の評価方法、安全管理の具体的方策、その有効性について検討する。

安全教育の理念、具体的方法、教育メディアのあり方について基礎的研究を行う。人間の振舞モデルに基づいたヒューマン・ファクター面からの対応策、とくに手順書、表示方式、支援システム、緊急時の行動様式に見合う対策について研究を進める。

スポーツ心理学特論

教授 児 玉 昌 久

スポーツにかかわる心理学的要因は、スポーツ活動に対する動機づけを始め、

チームメイトとの対人関係、技術向上のための獲得過程や訓練プログラム、その際の中枢神経系活動に関連する心理学的事象と末梢神経系を媒介する学習との関係、ゲームの状況に関する認知的側面、練習効果を最高に発揮するための self-management や指導・教育的側面など心理学のすべての研究領域にわたっている。

この講義では、特にスポーツにかかわる主要な心理学の問題をとりあげ、その基礎となる心理学上の理論の理解と、問題解明の方法の検討を目指し、さらにはそれらの方法の実践的な意義まで明らかにするものとしたい。

スポーツ生理学特論

教授 村 岡 功

規則的なスポーツ活動は、われわれの生体に様々な適応を引き起こす。このことはトレーニング効果として知られているが、実際には、それは実施されるスポーツ活動によって異なっている。

そこでここでは、各種スポーツに焦点を合わせて、それぞれを継続した場合の生体適応を検討し、スポーツ種目特性を生理学的な面から明らかにすることとしたい。

トレーニング特論

教授 加 藤 清 忠

スポーツが非常に盛んとなった現在、それと相俟ってトレーニングもまた種々の目的で多数の人によって実施されるようになってきた。ところが、近年の選手のドーピング問題に象徴されるように、トレーニング学が今反省期にあると言っても過言ではないように思う。そこで本講座では、まず過去の素朴な形態によるトレーニングを振り返りながら、近代オリンピック競技とトレーニング法がどのように関連してきたかという歴史的考察を行なう。更に、個々のトレーニング法の発展過程と科学的基礎について述べるとともに、将来のトレーニング科学の方向性を考えたい。

テキスト・参考書等については、授業中に指示する。

臨床心理学特論

助教授 門 前 進

授業に参加する学生が、各自文献を探してきて発表し、それについて自由討議をするという形態で進めていく。

文献としては、睡眠関係の臨床論文、または専門的、学術的著書に限定する。特に英語の文献が望ましい。日本語の文献に関しては、研究水準の非常に高いものだけに限る。臨床的睡眠という領域には、睡眠そのものを扱ったもの、意識状態に関するもの、暗示に関するもの、イメージに関するものなどであるが、睡眠を用いていなくても、イメージに関するもの、夢に関するもの、象徴に関するものなどが含まれる。

これらを通して、睡眠療法について、意識状態について、暗示について、イメージについて、心の構造、心の流れについて、一緒に考えていく。それらを通して、心理療法、さらには、人間が生きている実感を持つということについてのヒントが与えられれば素晴らしい。

環境認知学特論

教授 佐 古 順 彦

種々の環境場面における人の認知の機能を検討した諸研究を概観し、いくつかの理論について考える。場所の認知、地理的空間の認知、社会的空間の認知について、個人的な過程から社会的過程まで具体的なトピックスを取りあげる。受講者が個人的に感心のあるトピックスについても取りあげてゆきたい。

性格心理学特論

教授 富 田 正 利

性格ないし人格の心理学の占める領域は極めて多岐にわたるが、本講ではその評価法に焦点を絞り、外国文献の講読を中心にして考察を進めたい。本年度は

Semeonoff, B.: "Projective Techniques",

John Wiley, 1976

を取り上げて、投影法に関する基礎知識を包括的に講ずる予定である。

教育工学特論

助教授 野 嶋 栄一郎

最近における教育工学のトピックスとなっているテーマを、論文を主体に紹介し解説する。また、情報科学、認知科学との連携を深める教育科学の動向に特に注意をむける。

人間工学特論

助教授 石 田 敏 郎

人間はいろいろの“もの”に取り巻かれ、それを使って生活している。この“もの”の発達にともない「テクノストレス」、「労働疎外」といった問題が発生してきたが、最も優先的に考慮されなければならないのは、機器や装置がいかに安全に設計されているかどうかであろう。しかし、災害の半数近くは人間のエラーによるとさえいわれているように、設計者の意図しない行動を人間はしばしばとる。

本特論では、こうした事故に結びつく人間のエラーとその分類、事故分析の手法および安全確保のための対策等について考察を進める予定である。

スポーツ医学特論

講師 福 林 徹

スポーツ医学の中でもこの特論は、競技レベルのアスリートを中心とした内科的・外科的問題について解説をしてゆく。外科的には現場での処置や救急蘇生法について述べるとともに頭部・体幹・上肢・下肢についての代表的なスポーツ外傷・障害とその予防法・治療法について述べる。さらにはスポーツリハビリテーションとしての筋力トレーニング、持久力トレーニングについて解説する。内科的には選手のコンディショニングの管理を中心に循環器の問題、貧血やオーバートレーニングについてふれてゆきたい。さらには最近よく使用されるテーピングやブレースについても実技をふくめて解説し、この特論の受講者がある程度のコンディショニングコーチ的役割をはたせるようにしたい。

行動医学特論

講師 久保木 富 房

行動医学 (Behavioral medicine) の定義については1978年、Yale 大学の会議で、「行動医学とは健康と疾病に関する行動科学と生物医学 biomedicine、およびこれらの技法を発展、統合し、さらにこのような知識を疾病の予防、診断、治療およびリハビリテーションに応用するための学際的な分野である」と規定されている。そして、その基礎理論としては、学習理論、条件づけ理論、学習心理学があり、アプローチの特徴としては外に表われた行動に焦点をおくことであり、治療技法としては行動療法、行動変容、筋弛緩法、AT、バイオフィードバック法などがあげられる。また、歴史的には消化性潰瘍と体質、特異な性格、冠動脈疾患とA型行動パターンの研究があげられるが、現在その他の多くの分野、疾病においてこの行動医学が臨床的に応用されている。

以上のことについて講義する予定である。

認知科学特論

講師 佐 伯 胖

認知科学の歴史的展望をして、人間の認知過程が「状況」とその中に埋め込まれた「道具」（いわゆる「身体」も含む）と常に連携していることに注目するに至ってきた。最近の研究の流れを紹介する。これによって、認知科学が人間工学や人類学、デザイン工学など、従来とは異なった分野との交流が盛んになってきた。またコンピューター科学自体も、人工知能研究を中心としたものから、思考の支援、表現、相互交渉、などのためのツール（道具）としての「かしこさ」を追求するものになってきた。とりわけ、最近では、CSCW（Computer-Supported Cooperative Work）と呼ばれる、コンピューターを共同作業支援のためのツールと考える見方が盛んになってきている。

講義では、これらの流れをふまえて、私たちの身の回りの「当たり前のこと」を改めて注目し、反省する材料を提供する。

視覚工学特論

講師 斉 藤 進

コンピューター技術に代表される社会の ME（マイクロエレクトロニクス）化は、エルゴノミクスやヒューマンファクターに関する新たな問題を提起している。視覚エルゴノミクスの現状と発展の理解を目的として講義する。

内容は、

1. 視覚エルゴノミクス序論
2. 視覚の生理特性と高齢者機能
3. 情報表示機器のヒューマンインターフェース
4. 情報表示機器の人間工学的設計と標準化
5. オフィスや工場の視環境と証明設計
6. 視覚エルゴノミクスの計測と評価事例

などである。

3. 両専攻共通選択科目

人間科学特論

教授 濱 口 晴 彦

人間科学の特質の1つはいわゆる自然科学から社会科学までをふくめた総合的な対象認識にある。総合的なデシプリンとしての人間科学の現在位置は個々の科学の到達点の総和というにとどまらない組織的な対象認識にある。総合的で組織的な人間科学の成立と経過と現在について講述し、受講者との討論をまじえて、こうした人間科学の輪郭をくまどり、はっきりさせるようにしたい。この特論は、複数のスタッフにより構成される予定である。

生命科学概論

教授 中 村 桂 子

生命科学は、地球上の生命体に共通な生命現象を科学的に理解し、その知識を基に、生きものとしての人間を理解することを第一の目的としている。また、それだけではなく、そこから、人間にとって望ましい社会のあり方を考える作業も含む。つまり、「人間は生きものである」という事実を基礎に、人間をとりまくあらゆる問題を考える分野と言える。

具体的には、遺伝子研究を基礎にして、現在解明されつつある生命の姿を捉え、そこから生れる新しい生命観と、それを基にして築かれる文明のあり方について扱う。そこでは、生命の歴史、人間の歴史など時間の流れを重複する視点を積極的にとり入れる。

精神生理学概論

教授 山 崎 勝 男

精神生理学は人間の精神的な変数を独立変数として操作し、それに対応して生じる生理的な変化を従属変数としておらえるが、一方生理心理学は生理的な変数を独立変数として操作し、それに対応して生じる行動を、従属変数としてとらえると、両者の違いがある。いずれにしても、行動の諸側面を中枢神経系の構造と機能とに対応づけて考察する、心理学と生理学の学際的な立場をとる。

講義ではこの学問領域の主要テーマである生体リズム、精神疲労、時差ボケ、睡眠、夜間睡眠の諸相、睡眠ポリグラフィ、注意、定位反射と慣れ、注意と事象関連電位、脳機能の左右差についての広範な文献研究を基に、現在の国際的な研

究動向を探ることを目的としたい。同時に、動機づけ、学習、性格等についても上記のテーマと関連づけて講義したい。

バイオエシックス

教授 木村利人

遺伝子工学、生物・医科学など生命操作の急激な発達にともなうバイオエシックスの諸問題を、特に人権に焦点をしぼり、公共政策の観点からアプローチする。

教材の使用にあたり、高度の語学の知識と生物・医科学に関する深く幅広い知識が求められる。

本年度のテーマとして、特に、「人間遺伝子解析」「精神病患者としての患者の権利」「医師・患者関係のあり方」「ICUの基準」などをめぐるバイオエシックスがあげられる。必要に応じ、インタビュー等による資料の収集、関連諸施設への訪問、専門家との意見の交換等を行う。

精神測定法

教授 浅井邦二

精神測定法 Psychometric method は G.T.Fechner の精神物理学から発展したものであり、主として知覚、感覚をめぐる精神物理的測定法にはじまるが、一方、美的評価の実証的研究の始まりとも言われる彼の実験美学の研究に由来する評定法も、今日では広く社会的態度、嗜好、教育評価などにも用いられるようになっており、共に心理学的尺度構成に寄与している。またテスト法は F.Galton に由来するが、知能検査の作成で知られる A.Binet や二因子説を唱えてそれに由来する因子分析法の発展をもたらした C.E.Spearman らに続く人々の貢献により今日の心理測定の大きな柱として位置づけられている。

講義はこの流れを追うか、その中に浮かび上ってくるテーマを捉え、受講者諸君とお互いに検討し合って進めていきたい。

VII 学科目の履修方法

1. 本研究科では、入学の際所属する専攻の研究指導担当の教員が、学生の本研究科における授業科目の選択・研究一般および論文の作成を指導する。
2. 学生は、指導教員の指導にしたがって毎学年のはじめに、その年度に履修すべき授業科目を選択し、登録しなければならない。
3. 選択履修すべき授業科目の標準履修単位および履修方法は次のとおりである。

— 修士課程 —

- (1) 修士課程の修了要件は、通常2年以上4年以内在学、所要の授業科目について36単位以上を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、修士論文および最終試験に合格しなければならない。
- (2) 前項の36単位は、次のように履修する。

①履修基準

学年	研究指導および演習	専攻設置選択必修科目	共通選択科目	修了所要単位数
1年	8	8	4	20
2年	8	4	4	16
計	16	12	8	36

②履修方法

- (イ) 演習科目は、自己の研究指導の演習の他に、同じ専攻内で群の異なる演習を各学年で必ず1科目選択履修しなければならない。

(例：研究指導がA群に所属するものは、B群の演習を、研究指導がB群に所属するものは、A群の演習を履修する。従って、その年度で履修すべき演習は2科目となる。)

- (ロ) 次の事項については、入学後のガイダンスにおいて説明する。

- 各学年における履修し得る最高履修単位数
- 本研究科、他専攻設置科目（演習および選択必修科目）の聴講について
- 本大学、他研究科設置科目の聴講について

VIII 教育職員免許状取得について

1. 人間科学研究科で取得できる免許の種類及び教科は、次のとおりである。

免許状の種類

中学校教諭専修免許状

高等学校教諭専修免許状

免許状の教科

保健体育

2. 免許状取得の条件

本研究科入学以前に、中学校教諭一種免許状又は高等学校教諭一種免許状を取得した者、又は教育職員免許法の5条別表第1の所要資格を充たしている者。

なお、この免許法の所要資格のうち、すでに大学において、教科又は教職に関する専門教育科目の一部を履修している者は、人間科学部聴講生として別途入学し、不足している科目の単位を修得することにより、本研究科在籍中に免許法の所要資格を充たすことができる。

大学院学生の学部科目の聴講についての許可条件は、次のとおりである。

- (1) 教科又は教職に関する専門教育科目の一部を、すでに出身学部において履修している者に限る。現職の教員で、すでに一種免許状を修得している者を除く。
- (2) 研究科委員長及び指導教員が、正規の授業に支障がないと認めた科目・単位数に限る。
- (3) 許可は、当該年度4科目12単位を限度とする。
- (4) 聴講生としての学籍は、聴講する学部が所管し、成績通知書の配布、証明書の発行は当該学部が行う。
- (5) 聴講料は有料。

詳細については、人間科学学部事務所へ問い合わせること。

3. 免許状の取得方法

各専攻の修了に要する必要科目の、演習(16単位)、各専攻設置の選択必修科目(12単位)及び共通選択科目(8単位)の計36単位以上履修し、本研究科を修了し、修士の学位を得ることにより、両専攻とも保健体育の専修免許状が取得でき

る。

4. その他

免許状の申請は、本人が、住所地又は教員採用学校所在地の授与権者（都道府県教育委員会）にたいして行う。

ただし、3月の修了者で4月より教職に就く者に限り、大学がとりまとめて申請を代行（一括申請）し、学位授与式当日に免許状を手渡せるようとりはかっている

また、免許状授与証明書の請求は、授与権者に行うこと。

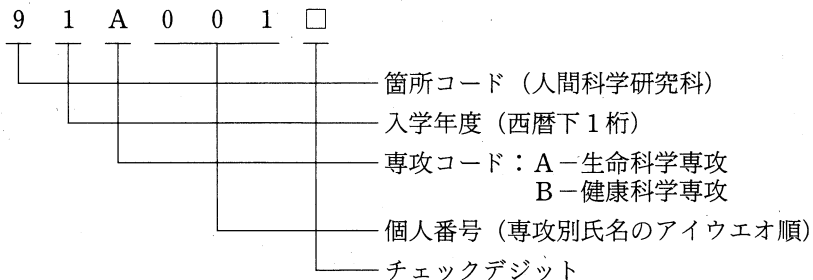
IX 学 生 生 活 等

1. 学籍番号

学生は各自学生番号をもつ。

学籍番号は各自の氏名にも代わるほど重要なもので、間違わないように記憶しておく必要がある。

1991年4月に生命科学専攻1年次に入学者は



〔注〕 CHECK-DIGIT (C. D) は、コンピュータへ学生番号を入力する際にのみ使用する数字で、正しく入力されたかどうかをプログラムでチェックするためのものである。科目登録や諸届に必要なから一緒に記憶しておくこと。

2. 学生証（身分証明書）

本大学の学生には入学と同時に学生証（身分証明書）を交付する。この学生証は、その身分を証明するために必要であるばかりでなく、学習上・事務手続き上のいろいろな場合に必要であるから破損・紛失のないように注意しなければならない。この取扱いは次による。

- (1) 学生証の交付を受けたときは、所定の写真を貼付のうえ、大学院事務所で大学割印・ラミネートを受けること。（大学割印のないものは無効）

なお、写真は

- ① 上半身脱帽正面背景なし。（全身撮影による顔の小さな写真を用いてはな

らない)

② 最近3ヶ月以内に撮影したもの。

(2) 学生証は常に携帯すること。

(3) 各種試験を受験するとき、図書館を利用するとき、学割、通学証明書の交付を受けるとき、その他大学院から指示があったときなどには、必ず学生証を提示しなければならない。

(4) 住所を変更したときは、学生証記載の住所を訂正し、大学院事務所で訂正の証印を受けること。

(5) 学生証は紛失しないよう十分注意すること。もし紛失したときは、大学院事務所にただちに届け出ること。

(6) 紛失その他の理由で学生証の再交付を受けるには、大学院事務所に申し出て、学生証を再交付されたら、上記1の手続きをただちにとること。

(7) 学生証は他人に悪用されるおそれがあるので、大切に扱うこと。

(8) 学生証は、修了または退学などにより学生の身分がなくなると同時にその効力を失うものであるから、これらの場合は、大学院事務所にただちに返還しなければならない。

3. システムカード

本大学の学生には、学生証のほかにコンピュータの事務手続きを能率的に行うためと、図書館の利用者カードとして使うため、システムカードを発行する。

このシステムカードは、証明書の申込時等に必要であるので修了時まで保管し必要の場合は提示すること。(紛失したときは届け出ること。再交付1件300円)

なお、このカードは在学中のみ有効であるが、修了後も学籍番号の覚えとなるように回収しない。

4. 各種証明書の交付

(1) 修了証明書、修了見込証明書、在学証明書、学業成績証明書などは大学院事務所で交付する。これらの証明書の交付を受けるには、大学院事務所に備えてある証明書交付願に所定事項を記入し、手数料を納入し、収入証紙を貼

付して大学院事務所に提出すること。

これらの証明書も、即時交付することになっているが、事務繁忙時には、数日を要する場合もある。

- (2) 通学証明書を必要とする者は、大学院事務所において所定の手続きをとり、その交付を受けること。
- (3) 学校学生生徒旅客運賃割引証（学割と略称）は、本人に限り年間10枚を限度として大学院事務所で交付する。ただし、原則として1回4枚以内とする。有効期間は発行日の3ヶ月間である。
- (4) 各種証明書の料金は大学院事務所内に掲示してある。

5. 諸願および諸届

学生諸君が勉学上の事故や身分その他に異動があった場合には、必ずその事項についての願または届を提出しなければならない。以下その要領を説明する。

(1) 諸願・諸届の作成についての注意

- ①用紙は大学院事務所で交付する所定の用紙を用いること。
- ②楷書ではっきり記入すること。（鉛筆不可）
- ③休学願、復学願、退学願の本人氏名および保証人氏名の記入は、それぞれの自署とする。押印も同じ。

(2) 諸願・諸届提出についての注意

①留 学 願

留学をしようとする者は、大学院事務所に問い合わせること。

②休 学 願

ア. 病気その他の正当な理由により、引き続き2ヶ月以上授業（試験を含む）に出席することができない者は、所定の「休学願」を提出し、大学院教務委員の面接を受け、研究科委員会の承認を得て休学をすることができる。

イ. 休学は当該学年限りであるが、特別の事情のある場合には、引続き1年に限り休学を許可することがある。

ウ. 病気で休学する場合は必ず医師（公立病院等）の診断書を添えなければならない。

エ. 休学中でも授業料は指定された期日までに納入しなければならない。

○休学願が第1期分納期日（4月15日）の前日までに提出された場合
〔1期分および2期分が半額〕

○休学願が第2期分納期日（10月1日）の前日までに提出された場合
〔2期分が半額〕

○休学願が第2期分納期日以降に提出された場合〔全額〕

○学年延長者〔基本料（当該年度所定の授業料の2分の1）〕

③復学願

ア. 復学は学年始めに限られる。

イ. 病気による休学で復学する場合は、必ず就学可能と認める医師の診断書を添付しなければならない。

ウ. 復学を許された者は、その年度の第一期分の授業料等を納入し、新生証の交付を受ける。

④退学願

ア. 退学を願う場合は、退学願のほかに学生証を添えなければならない。

イ. 学年の途中で退学する場合でも、その期の学費を納めなければならない。納入していない場合は、退学扱いとはせず抹籍扱いとする。

⑤現住所変更届，改姓（名）届，その他

ア. 本人または保証人が住所を変更した場合には、ただちにその旨を大学院事務所に届けでなければならない。

イ. 改姓（名）を行った場合には、その届に戸籍抄本を添付しなければならない。

ウ. 保証人が死亡した場合、またはそのほかの理由で変更を必要とする場合には、新しい保証人を選定して届けでなければならない。

（学則第32条～35条参照）

6. 大学院事務所の事務取扱い時間

窓口受付（授業実施期間および春季休業期間）

月曜日～金曜日 …… 午前9時～午後5時

休憩時間 12時30分～午後1時30分

土曜日 …… 午前9時～午後2時

(夏季・冬季授業休止期間)

月曜日～金曜日 …… 午前9時～午後4時

休憩時間 12時30分～午後1時30分

〔注〕次に記す日は事務取扱いはしない。

日曜日、国民の祝日、創立記念日、夏季・冬季休業中の土曜日、年末年始

7. 掲 示

大学および大学院からの学生に対する伝達事項は、すべて掲示によることになっているから、登校の際必ず見る習慣をつけること。

掲示を見落とすと、思いがけない重大な結果を招くことがあるから十分注意されたい。

掲示場は、教務に関する一切のこと、奨学金関係、大学および大学院からの伝達、その他事務所からの連絡などに使用する。

なお、本研究科の掲示場は、Dゾーン（大学院事務所・図書館開放閲覧室横）に設置されている。

8. 交通機関のストライキと授業

首都圏のE電がストを実施した場合のみ授業休講措置について

- (1) E電等交通機関のストが実施された場合（ゼネスト）首都圏におけるE電のストが

A 午前0時までに中止された場合、補常どおり授業を行う。

B 午前8時までに中止された場合、3時限目(13時)から授業を行う。 C 午前8時までに中止の決定がない場合は、終日休講とする。

上記はE電の順法闘争および私鉄のストには適用しません。

- (2) 首都圏E電の部分（拠点）ストが実施された場合、平常通り授業を行う。

- (3) 首都圏E電の全面時限ストが実施された場合

A 午前8時までストが実施された場合、3時限（13時）から授業を行う。

B 正午までストが実施された場合、6時限（17時55分）から授業を行う。

C 正午を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

(4) E電を除く私鉄および都市交通のみのストが実施された場合平常通り授業を行う。

(5) ただし、人間科学研究科に設置された授業科目を受講する者については、上記1・2・3は適用されるが4については

① 西武鉄道新宿線または西武鉄道池袋線のどちらか一方でもストが実施された場合

② ①の西武鉄道両線のストが実施されない場合でも、西武バス（所沢駅前および小手指駅前から運行される路線バス）のストが実施された場合次の通りとする。

A 午前8時までストが実施された場合、3時限（13時）から授業を行う。

B 午前8時を超えてストが実施された場合、終日休講とする。

9. 学生相談センター

本大学にはカウンセリング機関として、学生相談センター（本部キャンパス診療所ビル内）があり、所沢キャンパスにはその分室がDゾーン7階におかれている。

精神医学的、心理学的な面あるいは大学院の担当者に直接相談しにくいことがら等について、専門のカウンセラーが相談指導にあたっている。

10. 保健室の案内

4階南口正面(449号室、内線2449、緊急3000)にあり、常時保健婦1名、月・水・木・金は医師1名が勤務しており、次のとおりの業務を行っている。

業務内容

(1) 学生・教職員の定期健康診断、特殊健康診断

(2) 各種健康診断書の発行、(ただし、定期健康診断を受診した者に限る。)

月・水・金・午後1:30～3:40（個人カード持参のこと）

上記以外の日、毎日、保健婦が健康相談に応じます。

(3) 健康相談・スポーツ障害相談（木曜日）・精神衛生相談・その他悩み事相談・専門医の紹介

- (4) 学生健保組合の窓口
診療費領収明細書（健保室にあり）の受付
- (5) 救急処置・予防処置・傷病者の休養
- (6) 健保統計および健康管理に関する調査研究

11. 早稲田大学学生健康保険組合

この組合は、早稲田大学学生の相互扶助の精神に基づき、在学中の健康管理や傷病等につき一定額の補助を行い、学生の経済的負担をできる限り軽減させることを目的としている。

詳細については、「学生健康保健の案内」（大学院部事務所に常備してある）を参照のこと。

12. 奨学金制度

本学の奨学金制度は、本学独自の大隈記念奨学金・小野梓記念奨学金・早大貸与奨学金などの学内奨学金をはじめ、日本育英会・民間団体・地方公共団体の共学金がある。いずれの奨学金も、人物・学業成績が優秀でありながら、経済的理由により修学が困難な学生に給付または貸与することによって教育の機会均等を図るとともに、社会に貢献する人材の育成を目的としている。

これらの奨学金を受けるには、大学院事務所で配付している「CHALLENGE（奨学金情報）」を受け取り、これにしたがって必要な手続きを行うことになる。

なお、奨学金の募集時期は、毎年4月上旬（全学年）と9月下旬（1年生のみ）であるので、それ以前に「CHALLENGE（奨学金情報）」を受け取る必要がある。

X 所沢図書館および中央図書館の利用について

はじめに

所沢キャンパスに設置されている所沢図書館は、いわゆる教員図書室、研究図書室および学生読書室の機能を併せ持つ図書館である。

当図書館は、4階の学部事務所前のホールに隣接しており、ここには、人間科学部に関連する研究図書資料や学習図書資料を中心に、参考図書および一般教養関係図書資料を所蔵している。

当図書館内には、開放閲覧室、開架閲覧室、閲覧個室、グループ閲覧室、大学院生用閲覧室、逐次刊行物バックナンバー書庫、新聞閲覧コーナー、コピーコーナー、AVコーナー、ニューメディア室等の施設があり、学生諸君は書架にある図書を自由に利用できる。

当館の特長は、所沢にしながら中央図書館、理工学学部図書館の図書資料等のデータをオンライン検索できることである。また、外部データ・ベース（DIA, LOIS, HINET等）検索（有料）も積極的に行っているので、利用していただきたい。

図書館利用について

1. 開館時間

平 日 午前9時30分～午後6時

土曜日 午前9時30分～午後2時

ただし、開放閲覧室は、午前9時～午後9時まで利用できる。

2. 閉 館 日

日曜日、祝日、大学創立記念日、春・夏・冬季休暇および早稲田祭期間中の一定期間。そのほか、業務上休館の必要がある場合。

3. 利用者カード

(1) 図書館の入館および図書の貸出には、システムカードを利用者カードとして使用する。

(2) システムカードは、在学中有効なので大切に扱うこと。

(3) システムカードは、本人以外は使用できない。

(4) システムカードを紛失したときは、ただちに届出ること。

4. 図書館の入退館

- (1) 入館するときは、システムカードを自動入館装置に挿入して入館する。
- (2) 退館口には、CDS（図書帯出防止装置）が設置されているので、図書を館外に貸出する時は、カウンターで手続をすると、コンピュータで瞬時に処理される。

5. 検索方法

- (1) 全ての図書は、NDC（日本十進分類法）によって分類され、配架されている。
- (2) カードレス図書館なので、検索は、端末機でおこなう。端末機の使い方は、「WINE システム利用案内」かAV室にある「WIEN」の使い方のビデオを見るか、または、係員に相談すること。

6. 貸出・返却

- (1) 貸出・返却は、カウンターで手続きをすること。
- (2) 貸出冊数は、20冊、貸出期間は、30日とする。
- (3) 参考図書および雑誌等は、館外に貸出できない。
- (4) 返却期間が過ぎても返却がない場合には、反則規定が適用される。
- (5) 図書を紛失したり、破損したときには、ただちに届出ること。原則として現物または相当金額を弁償することになる。

7. 利用上の注意

- (1) 館内では、他人に迷惑をかけないように、雑談などは慎むこと。
- (2) 閲覧した図書は、配架されていた元の位置に戻すこと。
- (3) ラウンジ以外は、禁煙とする。
- (4) 館内での飲食を禁ずる。

8. 図書館の施設利用

- (1) 開放閲覧室（46席）
ホールから入るとすぐに開放閲覧室があり、ここは、図書館の閉館後も利用できる。
- (2) 新聞閲覧コーナー
ソファを設置してロビー風にしてあるので、気軽に利用できる。当日分から約1ヶ月分保存、いつでも利用できるようになっている。

- (3) AVコーナー 小型VTR等を設置し、ビデオライブラリーとして利用できる。
- (4) ニューメディア室
当初は端末機のみ設置して、検索室として利用するが、将来のニューメディア時代に対応できるようになっている。
- (5) エントランスホール
カウンター脇のエントランスホールは、ソファを配置してロビー風になっている。付近に学生向の雑誌および文庫本を配架してあるので、勉強の合間に気楽に利用できる。
- (6) グループ閲覧室 (10席/1室)・大学院生用閲覧室 (10席/1室)
グループで学習および研究等を行うときに利用できる。利用するときは、カウンターに申込むこと。院生用閲覧室は、院生なら自由に利用できる。
- (7) コピーコーナー
カード式複写機をコピーコーナーに設置してある。利用は館内図書資料のコピーにかぎる。
- (8) 参考図書コーナー
辞書、事典、便覧、ハンドブック、地図等の参考図書が集められている。
- (9) 開架閲覧室 (200席)
和書が配架されている開架書架をはさんで、南側と北側に雰囲気の違いのある閲覧室がある。
- (10) 教員・大学院生用開架図書エリア
①新刊学術雑誌コーナー、②ラウンジ・コピーコーナー、③検索コーナー、④閲覧個室、⑤洋書コーナー、⑥バックナンバー書庫、⑦キャレル (閲覧席) 等で構成されており、教員・院生等の研究者が利用し易いエリアになっている。

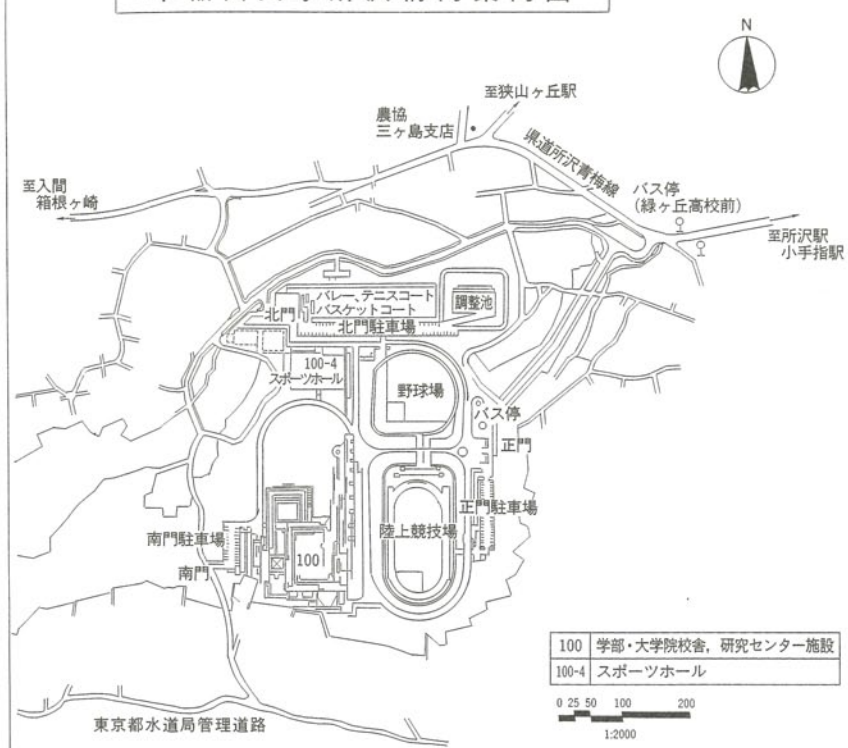
9. 中央図書館

早稲田大学創立100周年記念事業の一環として計画され建設が進められていた、新中央図書館を中心とする総合学術情報センターが本年4月開館した。延床面積33.416㎡、図書収蔵数約200万冊、座席数1,900席という、大学図書館としては、おそらく日本一の設備規模である。また、この、総合学術情報センターは、国際会

議や各種の学会など広範な研究活動のための「研究・会議設備」を併せ持ち、最新のエレクトロニクス技術を駆使して、学術情報の収集・生産・発表という国内でも屈指の設備を備えている。

所沢図書館は、この新中央図書館のサブセンター（分館）として位置づけられて、学術情報ネットワーク・システムで結ばれているので、所沢の端末機から新中央図書館の図書が自由に検索可能であるが、在学生であれば、システムカードを使って自由に入館し利用できるのもので、本部キャンパスに出向いたときは、是非利用していただきたい。

早稲田大学所沢構内案内図



交通案内

〔西武線〕

高田馬場 (約34分) → 所沢
池袋 (約26分) → 所沢
国分寺 (約11分) → 東村山 (約3分) → 所沢

〔JR 武蔵野線〕

南浦和 (約22分) → 西国分寺 (約11分)

〔西武池袋線〕

新秋津 (徒歩約5分) → 秋津 (約3分) → 所沢 (約6分) → 小手指

〔西武バス〕(早稲田大学)

小手指駅 (約15分) → 早稲田大学 (南口)

〔西武バス〕(三ヶ島農協 宮寺 箱根ヶ崎行)

所沢駅 (約24分) → 緑ヶ丘高校入口(下車) (約30分) → 箱根ヶ崎駅 (JR 八高線) (西口)

